

現代サマルカンドの詩人達

松本耿郎

I. ウズベキスタンの言語文化

1991年にソ連が崩壊して、中央アジアにカザフスタン、キルギスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンの5共和国が独立した。ただし、旧ソ連では中央アジアという概念の中にカザフスタンを含めていなかった。旧ソ連では「カザフスタンと中央アジア」という呼び方が用いられていて、カザフstanは中央アジアから区別されていたのである。これらの国々はそれぞれ旧ソ連時代にソ連邦を構成する共和国であった。すなわち、1924年以降に、スターリンの「境界画定」政策によって人工的に作りだされた5つの「社会主義民族」の共和国が独立したものである¹⁾。

この「境界画定」と「社会主義民族」の政策はスターリンが当時存在していた中央アジアの「汎トルコ主義運動」、「汎イスラーム運動」などを押え込み、この地域を分割統治するために取られた措置であることはよく知られている。スターリンの「社会主義民族」を創出しようとする政策により、カザフ語、キルギス語、トルコマン語、ウズベク語、タジク語などが民族語という地位を得た²⁾。これらの言語のうちタジク語を除けばそれまで文章語にはなっていなかったのである。カザフ語、キルギス語は口碑伝承をもってはい

だが、これらの言葉を話す人々はボルシェヴィキ革命の前後の時期には近代的文章語としてはカザン・タタール語を主として使用していたし、トルコマン語の話し手はアーゼリー語を近代的文章語に使用していた。ウズベク語の話し手にしても事情はにたりよったりであった。彼らは、長い間その思想表現の手段として古典アラビア語、古典ペルシア語、チャガタイ・トルコ語ないしオスマン・トルコ語を使用していた³⁾。

もっとも、シル・ダリヤ以南の地方では、アリー・シール・ナワーウィー (1441～1501) などの努力により15世紀後半からチャガタイ・トルコ語が古典ペルシア語とならんで文章語として文人たちの間で主として用いられるようになっていた。現代のウズベク語はこのチャガタイ・トルコ語および Sart-Uzbek 語 (ウズベク語を話すようになったタジク人の話すウズベク語) に基礎をおくものである⁴⁾。

中央アジア5カ国のうちウズベキスタンとタジキスタンは文化という点で最も重要な国である。ウズベキスタンは15世紀のシャイバーニ・ハン国という最初のウズベク国家の伝統を受け継ぐ国として中央アジアでも最も重要な国である。ただし、ウズベキスタンという国民国家の概念はボルシェヴィキ革命ののちにクレムリンの政策によって作りだされたものである。シャイバーニ・ハン国は王朝国家であって、国民国家ではなかった。タジキスタンも同様にクレムリンによって作り出された国である。しかしタジキスタンは中央アジアの先住民であるイラン系諸民族の文化の継承者としてのタジク人の国であるという自負をもつ。ちなみにタジク人はルーダキー (950没)、ダギーギー (975没)、フェルドウシー (1025没) のような古典ペルシア語の詩人たちをタジク語の詩人とみなしているのである。この点ではタジク人は中央アジアで最も文化的に豊かな人々である。20世紀になってもタジク語はサドルッディーン・アイニー (1878～1954) やトゥルスンザーデ (1911～1977) やミールシャカール (1912～) といった優れた文学者を生み出している。

ところでカザフ語、キルギス語の間の差は1つの言語の中の方言差という程度のものであった。この2つの言語は、もともとカザフ・キルギス語として1つにまとめ、その中にカザフ方言、キルギス方言があると見ることができ、程に密接な関係にある。スターリンの政策によってこれらの方言が文章語として整備され、それぞれ民族語の地位にまで高められたのである。このほかにアラル海付近で話されるカラカルパク語もカザフ・キルギス語から分離され民族語の地位があたえられたのである。カラカルパク人、キルギス人、カザフ人がそれぞれ自分の言葉で話し合った場合、ほぼ相互に理解しあえるのである⁵⁾。

他方、ウズベク語とタジク語ではウズベク語がトルコ語系の言葉であり、タジク語がイラン語系の言葉である。その意味ではまったく違った2つの言葉でありながら、この2つの言葉の話し手は文化を共有している。

勿論、ウズベク語の全体についてタジク語との関係の深さをいうことはできない。今日ウズベク語と言われている言葉はおおむね5つの方言に分類されている。すなわち、(1)中央ウズベク語：これはタシケント、ウラ・トゥベ、ジザク、サマルカンド、カルシ、カタ・クルガン、ブハラで主として話されているウズベク語である。これはタジク語さらに古典ペルシア語および古典アラビア語の影響を強くうけた、いわゆるSart-Uzbek語であり、現代ウズベキスタンのウズベク語の基礎になっている。この言葉はもともと、タジク語を話していた人々がウズベク語を話すようになり成立した方言である。したがって、イラン系の言語の濃い影響を語彙、表現の面に認めることができるにとどまらず、中央ウズベク語ではトルコ語の基本的特徴である母音調和がイラン系言語の影響でなくなっている。(2)フェルガーナ方言：これはアンディジャン、コーカンド付近で話されている。この方言はイラン語の影響を受けたウズベク語とそうでないウズベク語の交錯する地域で使用されている

ものである。したがって、この方言自体のなかにさらなる差異が認められる。コーカンド付近で用いられるこの方言はカザフ語、キルギス語に類似する。しかし、ナマンガンで使用される方言はイラン系言語の影響が濃く認められる。フェルガーナ峡谷に住んでいるウズベク人のうちイラン系言語の影響下でない人々の話す方言はウイグル語の影響を認めることができる。(3)カザフのウズベク方言：これはいわゆるキプチャク・ウズベク語である。サマルカンドの南西、カシュカ・ダリヤにそって北上する地域に住むナイマン・カザフの話すウズベク方言である。彼らは半遊牧民である。(4)北方ウズベク方言：これはタシケントの北方からチムケントさらにカザフスタンのトルケスタンにかけて話されている方言である。これが最も純粋なウズベク語であると見なされている。このため現代ウズベク語を制定するにあたって、一時この方言を基準にしたことがある。この北方ウズベク方言とカザフ語、キルギス語、カラカルパク語は近い関係にあり、相互理解率も高くなっている。ウズベク語とカザフ・キルギス語を区別する指標は、名詞複数形をつくる複数辞がウズベク語では名詞語尾の子音に同化しないのに、カザフ・キルギス語では同化を起こすという点である。すなわち、at（馬）の複数ウズベク語では atlar であるが、カザフ語では attar となり、複数語尾 lar の最初の子音 l が名詞語尾 t に同化している。(5)トルコマン系の人々が話すウズベク語：主としてヒヴァの周辺で話されている。これは音韻の点でトルコマン語の影響を強く受けている⁶⁾。

これらのウズベク方言のうち中央ウズベク語が今日のウズベキスタンの標準の言語になっているのである。しかしながら、他方、今日のウズベキスタンにはタジク語を母語とする人々もたくさん住んでいる。タジク語は北方方言と南方方言の2つに大別することができる。今日のウズベキスタンで話されているのは主として北方方言である。タジク語が主として話されている地域はサマルカンド、ボハラ、フェルガーナの地域である。これらの地域はウズベキスタンのなかでも肥沃な地方である。これらの地方にはウズベク人も

大勢住んでいる。ウズベキスタンの国土の大部分はキジル・クム砂漠が占めていて、そこは人の住めるようなところではない。要するに居住可能な地域にウズベク人とタジク人が混住しているのである。この地域に住むウズベク人は人種的にはほぼイラン系の特徴を備えている。ウズベク人とタジク人との間の通婚も頻繁に行われている。タジク語を使うことができるウズベク人、ウズベク語を使うことのできるタジク人が数多くいる。その上に長年にわたるモスクワ中央政府の支配下にあったためにウズベク人もタジク人もロシア語を習得している。サマルカンド、タシケントなどの大都市にはウズベク語、タジク語、ロシア語の3か国語使用者が相当数いる。彼らの言語生活を観察していると、言語社会学でいうコードスイッチングが頻繁におこなわれるのを認めることができる。すなわち、談話をしている人と人の間でウズベク語で話し合っていたのが、突然タジク語に変わり、さらにロシア語に変わり、またウズベク語に戻るといような現象がよく見受けられるのである。

旧ソ連時代にスターリンの政策が長く踏襲され、ウズベク人とタジク人を分離しようとする試みが続けられた。しかしながら、両者はあまりにも多くのものを共有し密接な関係にあるのでこの試みは成功しなかった。ただし、ウズベキスタンにおいては人口の点ではウズベク人が多数であり、タジク人は少数派であるが、文化的にはタジク人のほうが勝っているといえる。これはロシア語が公用語になる前の19世紀末ころまで中央アジア、とりわけ現在のウズベキスタンの国土となる地方では古典ペルシア語が公用語として使用されていたことによる。ウズベク人もタジク人も古典ペルシア語を社会的地位を得るために習得したのである。古典ペルシア語とタジク語はもともと同一の言語であったものである。近世になってタジク語には古典ペルシア語には見受けられない文法要素が多少認められるようになり、また語彙の点でウズベク語の影響が顕著になるが、15世紀末まではタジク語と古典ペルシア語に大きな差がなかった⁷⁾。この意味で古典ペルシア語はタジク人にとっ

て母語であり、古典ペルシア語により文学作品をつくり続けることができた。この伝統があったために近代になってもタジク語はすぐれた近代文学を生み出すことができたのだとみることができよう。

勿論、ウズベク人もチャガタイ・トルコ語による文学作品をつくることもあったが、彼らの文学作品の表現媒体は主として古典ペルシア語によっている。現代ウズベク語による文学表現が現れるようになったのは極めて新しいことである。タジク語のサドルッディーン・アイニーに匹敵するようなウズベク語の作品はまだ現れていない。もちろん、ウズベク人の作家にも優れた文学的資質を備えた者もいる。しかしながら、そういう作家はむしろロシア語で自分の作品を発表しているのである。ウズベク人がウズベク人のナショナル・アイデンティティーを獲得するため現代ウズベク語という民族語を確立しようとする努力は1923年から以後10年間、いわゆるコレニザーツィア（土着化）政策の時代に活発に推進されていた。その運動の中心になっていたのがアブダルラウフ・フィトラト教授であった。彼はコレニザーツィアの以前はタジク語で作品を発表していたが、コレニザーツィアの時期になって現代ウズベク語で次々と中央アジア・トルコ文学の研究を発表していった。しかしながら、このような文学者はコレニザーツィアに続くスターリンのロシア・ナショナリズム、反民族主義政策によって弾圧され肅正されたのである。スターリンの民族文学者に対する肅正は苛烈をきわめた。フィトラト教授もその犠牲者の1人であった⁸⁾。スターリン以後のフルシチョフ、ブレジネフ時代においても民族語に対する政策はあまり変わらず、かえってロシア語化政策が推進されていった。このスターリン時代の民族文化への弾圧、それ以後のロシア語化政策は旧ソ連の諸民族文化の発達に暗い影を投げかけている。このために現代ウズベク語は民族語としてはまだ発達途上にあり、現代ウズベク語による優れた文学作品は、1981年になってようやくママダリ・マフムードフの“Olmas gaigalar”（不死の断崖）という小説があらわれた程度である。この小説は19世紀中期の帝政ロシアの中央アジア侵略を題材

にとり、ムスリムの抵抗と挫折を描いている。その中で、著者はナショナリズムと反ロシア感情を公然と表している⁹⁾。

ところで、スターリンおよびその後継者たちによる民族文化にたいする弾圧にもかかわらず、タジク語は古典ペルシア語の文化伝統を引き継ぎ、近代タジク語文化を守り続け、独自の文学作品を生み出し続けたのである。これは驚異的な事実である。勿論、タジク人の知識人たちも、スターリンの「民族の墓場」の時代を経験したのである。タジク人の知識人で「ブルジョア民族主義者」の烙印を押されたものも数多くいた。それにもかかわらず、タジク人はタジク語による優れた文学作品をうみだしつづけることができた。他の民族文学者たちが自分の民族語によるのではなくロシア語による自分の作品の発表を選んでいた時期にも、タジク人の文学者の多くはタジク語による文学作品を発表しつづけたのである。

II. タジク語の近代文学

ところで、20世紀の初頭1917年にマンギート家のブハラ汗国が消滅するまで、中央アジアのタジク語世界では古典ペルシア語の文学伝統がかたくなに守られていた。知識人の思想表現は古典ペルシア語、古典アラビア語、チャガタイ・トルコ語などでおこなわれていた。さらに言語のみならず文学の題材もまたバラやナイチンゲールや愛という中世的なものに限られていた。ペルシア文学の2人の巨人サアディー（1193～1291）とハーフェズ（1320～1389）の美文、そしてインド様式の創始者アミール・ホスロウ・デフラヴィー（1253～1325）のスタイルが特に好まれたのである。アミール・ホスロウ・デフラヴィーは近代のイランにおいてはそれほどおきなウエイトを占めない詩人であるが、インド・ペルシア文学の世界および中央アジアのペルシア語文学の世界では極めて重要な詩人である。この詩人は父親が中央アジア出

身のトルコ人で母親がインド人であったこともあって、中央アジアの人々がより一層の親近感を抱いているのであろう。現代のウズベキスタンのペルシア文学研究家の間でも最もよく研究されている詩人の1人である。彼の詩には格言的な宗教詩が多い。次に見るのは彼の詩の1つである。

全世界の生命と存在とは汝なり
また、世界と交わらぬのも汝なり
汝、神の秘宝の鍵として来り、
汝、玩具を求めて来るにあらず。¹⁰⁾

このような宗教詩の伝統が連綿として途絶えることなく中央アジアでは受け継がれて来たのである。そして、マンギート朝のブハラではこの伝統を墨守して、新しい要素を受け入れようとしなかったのである。それゆえに、20世紀初頭まで、タジク語の世界では古典ペルシア語の文学伝統がそのまま保たれていて、タジク文学と古典ペルシア文学の間に区別がなかったのである。そうした状況のなかで、鋭い感受性と明晰な観察力を備えたアフマド・ダーニシュ（1827～1897）は、「不思議な出来事」（Navāder al-vaqāye‘）という題の長大な随筆の中で当時のブハラ汗国の社会状況をつぶさに描写記録し、それを近代西欧社会との比較において批判したのである。彼はこの随筆を書くにあたって、文体は古典ペルシア語のそれを用いているが、題材はそれまでの中央アジアの文学伝統にはまったくなかったものを取りあげたのである。この随筆は出版されることなく、ごく限られた文学サークルのなかで写本のまま回し読みされたものだったが、彼の周辺にいた文人たちに絶大な影響を与えた¹¹⁾。一般に、近代タジク文学はアフマド・ダーニシュのこの書物に始まると見なされている。彼の友人たちもまた、彼にならって古典ペルシア語をもちいて当時の社会を批判し、改革の必要性をとく詩や文章を書くようになった。一方、19世紀末から20世紀の初めにかけて、ユーラシアのトルコ

民族のほぼ全体を風靡していたジャディード運動 (Jadīdism, 革新運動) がタジク人にも影響を与え始めていた。

こうした時代の変革期にサドルッディーン・アイニー (1878~1954) が現れた。彼はアフマド・ダーニシュの影響下にジャディード運動の作家として出発した。彼は古典ペルシア語ではなくタジク語を用いて文学作品を1917年のボルシェヴィキ革命以後次々と発表し、近代タジク文学の基礎を築き、また社会主義リアリズムの民族文学を完成させた人である。ただし、彼はプロレタリア文学の作家であったわけではない、彼の文学思想の中核にはイスラームがある。しかし、彼のイスラームは封建主義と結び付いたイスラームとは別物である。彼は文学を通じて中央アジアの中世的封建的社会と戦った。そして、科学知識と教育の普及に尽力した。ボルシェヴィキ革命はサドルッディーン・アイニーをはじめ当時の中央アジアの革新的知識人にとっては、はじめはジャディード運動の継続と受け止められていた。しかし、ソヴィエト政権によって次々と進められる社会改革の波は中央アジアにも当然及んで来た。サドルッディーン・アイニーはこの一連の社会改革を肯定的に受け止め、古典ペルシア語の伝統にはまったく見られない詩体で社会主義革命を称える詩を書いた¹²⁾。しかし、社会主義革命詩の分野で最も成功を収めたのはイランでの社会主義革命の武装蜂起に失敗し亡命して来たアブ・ル・カーセム・ラーフーティー (1887~1957) である。彼は1922年のタブリーズでの蜂起に失敗し、ソ連に亡命し1925年以後現在のタジキスタン共和国のドシャンベに居を据えて文筆活動に専念した。彼は古典ペルシア語の様々な韻文形式を用いて社会主義建設の叙事詩を書いた¹³⁾。

スターリンの独裁的指導のもとに社会主義革命が進行してゆく時期に活躍した詩人たちのなかで特筆すべき詩人はミールザー・トゥルスンザーデ (1911~1977) である。彼は農奴解放を称える詩を書き、また農村につたわる民間伝承の収集に努力し、対独戦争に際しては銃後の士気を鼓舞する詩を書いた。戦後も彼はプロレタリア文学者として活躍し、また世界各地の民族

解放運動を支援する詩を書き続けた。彼こそはソ連共産党主任文芸理論家アンドレイ・ジュダノフのもっとも忠実な使徒であったといえよう¹⁴⁾。ワルソウ解放の戦闘で戦死したサマルカンド生まれの詩人ハビブ・ユースフィー(1916～1945)も大祖国戦争を戦い抜くのに奉仕したタジク語の詩人である¹⁵⁾。トゥルスンザーデのほうは、戦後はタジク科学アカデミーのメンバーとなり、またタジク共和国の最高会議のメンバーにも選ばれた。一方、この時期にサドルッディーン・アイニーは小説家として「ダーホンデ」(1928)、「奴隷たち」(1934)などを発表し、中央アジアの貧農たちを主人公にした社会主義リアリズムの小説を書き続けた。

第2次大戦後にはコルホーズ小説、生産小説と呼ばれる社会主義小説がいくつもタジク語で書かれた。それらはスターリン支配の時代の産物である。支配的イデオログの意向を忠実に反映している作品が散文、韻文の各分野で書かれた。ただし、韻文を書く場合には、多くの詩人達が伝統的な古典ペルシア語詩のスタイルを守っているのは興味深い。

スターリンの死後、非スターリン化が文学の分野にも影響を与えるようになり、小説家たちはそれまでにとりあげなかった題材を取り上げて著作をするようになった。1950年から60年にかけて、過去の回想や個人の心理状態が文学の題材にとりあげられるようになった。この時期でも、ソ連指導部はなお文学が共産主義の勝利に奉仕しなければならないという基本方針を放棄してはいたわけではない¹⁶⁾。この時期に現れた重要な作品はジャラル・エクラミー(1909～)の「私は罪人」(1957)である¹⁷⁾。この小説は世代の違いに由来する思考のギャップのために生ずる家庭生活のなかでの様々の問題を題材にしたものであるが、やはり「進歩」という社会主義的コンセプトを全面に押し出している。

タジク語の近代文学者たちは概観したように、社会主義国家建設に積極的にかかわってゆきながらタジク語の文学を守って来た。このため、スターリン時代の厳しい思想統制と文芸活動への党の介入にも拘わらずそれほどお

きな犠牲をだすことがなかったようである。この点は、ウズベク語の文学者フィトラト教授が処刑されたのと際立った対照をなしている。コレニザーツィアの時代にウズベク語の文学の確立に専念したフィトラト教授がスターリンの指導部により処刑されたことは、ウズベク語文学の発展にとっておおきなマイナスであったことは否定できない。

Ⅲ. ウズベキスタンとタジキスタン

スターリンの「境界画定」政策によって1924年にウズベキスタン共和国がつくられ、1929年にはさらにそこからタジキスタンが分離されて別の共和国となったわけである。これによってタジク文化の中心であったサマルカンドとボハラはウズベキスタンに編入されてしまった。ソ連崩壊後、サマルカンドとボハラをタジキスタンに編入して大タジキスタンを作りたいという動きもあった¹⁸⁾。これは現在のところ単なる夢想の域にとどまっている。1979年の統計ではウズベキスタンの人口は1,538万9千人であるとされ、そのうちタジク人は59万5千人であるとされている。一方同じ統計ではタジキスタンの人口は380万6千人で、そのうちウズベク人が87万3千人であるとなっている¹⁹⁾。ただし、この場合この統計はタジク人とウズベク人の区別の基準を明確にしていない。おそらく使用言語の違いを基準にしてタジク人とウズベク人の区別を設けているとおもわれるが、ウズベク人のなかにはウズベク語とタジク語のバイリンガルの人が相当の比率を占め、同様にタジク人のほうでも同じくバイリンガルの人が多くいる。また、ウズベク人という名称自体にも問題がふくまれている。イラン本土からボハラに移住してきたイラン人たちのコミュニティーでは、自分達以外の人々を話している言語の関係無くウズベク人と呼ぶ。一方、1920年代には、ボハラの4分の3の人々はタジク語を話しながらも自分達はウズベク人であると見なしていた。また、

サマルカンドにいるイラン系シーア派の移住民の子孫はウズベク語を話しているのに自分達をイラン人であると見なしている²⁰⁾。このような現象は現在のハンガリーに住むオセチア人の子孫のコミュニティーにも認められる。オセチア系の人々はオセチア語の語彙を多量に含んだハンガリー語を話している。いかに多量のオセチア語の語彙を含んでいようとそれがハンガリー語であることには間違いないのである。しかしながら、彼らは自分達をオセチア人であると見なしている。このような現象がウズベク・タジクの間にもしばしば認められる。すなわち、ウズベク語を母語としながらも自らをタジク人とみなしたり、タジク語を母語としながらも自らをウズベク人と見なすという現象である。結局、言語がナショナル・アイデンティティーの決め手にはならないということになる。

さらに、ウズベキスタンという国はスターリン時代に作り出された共和国であり、地理的概念としてウズベキスタンという地域があったわけではない。ボルシェヴィキ革命のまえにはトルコ系住民の住んでいる地域という意味でトルキスタンという漠然とした地理的概念は存在していた。しかしながら、このトルキスタンは現在のウズベキスタンよりはるかに広い地域を指し、カザフスタン、キルギスタン、トルクメニスタンから現在の中国新疆省までも含む概念であった。これはもともと、オスマン・トルコ帝国内に生まれた汎トルコ運動に影響されたジャディード主義者たちの概念であった。彼らにとって、この中央アジアに広がる大トルキスタンがwatan（祖国）だったのである。1991年の独立後も地図上の国境線は中央アジア諸国の間に存在しているが、自動車、鉄道で移動する場合には国境は存在していない。しかも、中央アジアの各共和国の国民の大多数は未だに急ソ連の旅券を使用している。旧ソ連時代にウズベキスタン共和国という名目上の共和国がつけられたが、それはクレムリンの支配の便宜上つけられた一種の行政区画にすぎないものであった。そこでは、コレニザーツィアの時代を除けばナショナル・アイデンティティーを醸成するような政策は全くといってよいほど実施されなかつ

た。官僚機構においてもクレムリンから送り込まれたスラヴ系の人々によって実権が握られていた。かつての満州国のような植民地国家であった。独立後スラヴ系の人々がかなり立ち去ったとはいえ、まだ多くのヨーロッパ系の住民が住み着いている。こうしたヨーロッパ系住民との共存をしなければウズベキスタンの未来はない。このような状況のなかではウズベク民族主義を全面に押し出すこともできない。またウズベキスタンにおけるウズベク人にとってはタジク人との複合アイデンティティーをもつ者が多いからウズベク民族主義というイデオロギーも根を下ろしにくい。もともと、ムスリム系の住民にとってナショナリズムはインターナショナルな性格を持つイスラームの教えと相容れないものである。それに加えて、この60年以上「ソヴィエト的人間」に基礎を据えたインターナショナルリティーを標榜する共産主義が浸透させられて来た。ナショナリズムはブルジョア的なものとして断罪され続けてきたのである。こうした現実を考えるとウズベキスタンにおけるウズベク人の間にウズベク・ナショナリズムというものが普及することは非常に可能性が低いというべきであろう。

これにたいしてウズベキスタンに住むタジク語を母語とするタジク人は、その文化的伝統が古典ペルシア語の文化と重複するので、民族文化にたいする誇りという点ではウズベク人より強いといえる。タジク人は生まれ故郷という意味の *watan* ないし *vatan* という言葉によってより明確な郷土意識をもつ。タジキスタンの現代詩人ゴルロフサールの次の詩はこのことをよく示している。

いつのころ故国 *vatan* という言葉を初めて口にしたのか、記憶がない。

愛をこめて、私の国を「我が命」と呼んだ。

故国のために、初めて私が詩を歌ったのは、

私が母の膝に顔をしかと埋めたあの日、

それは、初めて畑の穂波を見詰めた日、

それは、初めて野の花を数えた日、
私が、嬉々として故国という言葉初めて口にしたとて、不思議はない。²¹⁾

旧ソ連時代、ウズベク語にせよタジク語にせよ vatan という言葉は「社会主義の祖国」という意味をもっていた。この言葉がある特定の民族の居住地を指すような使用法は当局の好むところではなかったはずである。それにもかかわらずこの詩人はタジク民族の故郷という意味でこの言葉を用いている。これはタジク人の郷土にたいする愛着のつよさを物語っている。ネイションという意味ではタジク人が言語、文化、地理的条件を最も備えているということができる。したがって、ウズベキスタンがタジクとの文化的絆の強さを軽視して、ウズベクの文化的固有性を強調し、ウズベク民族主義のようなものを徹底しようとする、現在のウズベキスタンは混乱に直面する恐れがある。現在のウズベキスタンにおけるタジク人のネイションとしての意識は相当に強い。このことは、次に見る現代サマルカンドのタジク語詩人たちの作品の幾つかを見ても明らかである。

サマルカンドの花

大地よ、お前の上にはいっぱい花が咲いている。
いずれの花が最も馨しく、かつ魅惑的なのかと、
友よ、このような問いをするのなら、
「それは、サマルカンドの花だよ」と私は言う。

それは、私の生涯で初めて
春の始まりをこの地で見たのだから。
私の生涯で初めて
その大地からチューリップを一つ一つ摘みとったのだから。²²⁾

タジキスタンよ幸あれ

高き嶺々は花園の守り。
波立つ川は勇者たちに命を吹き込む。
バラの頬の乙女の愛嬌は友をつくり、
老人と若人の瞳からは光と炎が燃え立つ。

タジキスタンよ、幸あれ

あなたの名は私にいのちを恵み、健やかさを与える。
あなたの名は愛するものの名誉と誇りの旗印。
あなたの名は敵を灰に変える炉。
あなた自身はとこしえに若やぎ喜びに満ちた愛の楽園。

タジキスタンよ、幸あれ

あなたを海にたとえれば、
その人々は波のごとく、その波は黄金を撒き散らす。
友愛と親切が波のように溢れている。
ドシャンベはあなたの頭に、友のてづから供えられた花の冠。
祝福の星はあなたにむかって輝いている。
この世のあるかぎり、

タジキスタンよ、幸あれ²³⁾

この2つの詩は現代サマルカンドのタジク語の詩人アクバル・ピールーズイーの作品である。アクバル・ピールーズイーは1947年にサマルカンド国立大学英語科を卒業し、現在は雑誌「サマルカンドの声」の文化部主任である。これらの詩は1991年に出版された詩集「心の嵐」に収録されているものである。「サマルカンドの花」および「タジキスタンよ幸あれ」の2つの詩は、

自らの vatan（郷土）に対する深い愛着と思い入れを歌ったものである。この詩人は別に「ミールザー・トゥルスンザーデ先生に」という詩を書いている。その中で、ソ連時代に活躍した共産党の詩人ミールザー・トゥルスンザーデをたたえながら、次のような詩句を記している。

あなたの詩は嶺の小川。

あなたの詩は勇者たちの旗印。

タジク語は一時代の王者となった。

タジクの名は記録に留められた。²⁴⁾

すでに述べたようにミールザー・トゥルスンザーデはソ連時代に活躍した詩人である。彼はソ連共産党の方針に最も忠実だった文学者の1人であった。スターリン時代から活躍し、スターリン批判の時代にもソ連共産党の意向に即した作品をタジク語で発表し続けた詩人である。ソ連崩壊の時代においても、タジク人の世界ではミールザー・トゥルスンザーデをこのように高く評価する人もいたのである。このことは、ウズベキスタンにおいては今なお共産党の影響力が存続していることを物語っている。事実、今日のウズベキスタンの実権は旧共産党が衣替えしただけの人民民主党の手の中にある。

他方、ミールザー・トゥルスンザーデはタジキスタンの国民詩人だった人物である。そのような詩人をウズベキスタンのタジク語詩人がこのように称賛し、それに加えてタジク語の榮譽を歌い上げるということは、ウズベクとタジクの分離につながりかねない危険性を孕んでいる。ウズベキスタンにおけるタジク人の立場は、タジキスタンが国境を接しているために極めて微妙なものである。しかも、ウズベキスタンのなかには長年にわたってタジク文化の中心であるサマルカンドとボハラがある。アクバル・ピールーズイーの「サマルカンドの花」という詩を見てもタジク人のサマルカンドにたいする

思い入れの深さを十分に読み取ることができる。

サマルカンドを主題にして詩を歌う詩人としてはサリーム・ケンジャがいる。かれは1936年にサマルカンドに生まれたタジク語詩人である。この詩人がサマルカンドについて歌った詩の1つに次のような詩がある。

我らの世界、サマルカンド

我らの世界の心、サマルカンドよ、
我らの大地にして天なるサマルカンドよ、
私にとって母よりも親しき人はいないのだが、
母のように優しきは、サマルカンド。
御身の美しき面影のような春はない。
永遠の春、サマルカンドよ、
御身の美しき名は砂糖よりも甘く、
我らの身と心よりいとしきサマルカンドよ、
御身への愛は常に我らの心の中に、
御身は我らのとこしえに続く言葉の中に留まる。
サマルカンドよ、
私の頭は聳え立つ御身の光塔のように高く。
御身は私の無限の誇り。サマルカンドよ、
私は、御身の宮居の壁画から靈感を得る。
御身は我らの心の光、サマルカンドよ、
御身の石の一つ一つがいにしえの書物。
我らの歌、我らの物語、サマルカンドよ、
私の命は御身によりて彩られる。
御身こそ我が指標、サマルカンドよ。²⁵⁾

これは、サリーム・ケンジャによる古都サマルカンドへの賛歌である。サマルカンドは美しい町である。アレキサンダー大王の時代から世界の征服者たちが目指してきた町なのである。旅人がアフラシヤブの丘に続く坂道からサマルカンドの旧市街を振り返って望むと、その類い希な美しい眺望に息を呑む。そこに生まれ育った詩人がこれほどまでに思い入れをもつのも十分理解できる。いずれにせよ、タジク語詩人たちのサマルカンドにたいする思い入れの深さは、ここが彼らにとってのタジク文化の中心であるという意識につながっている。タジク人にとってこのサマルカンドおよびボハラは自分達の *vatan* (故郷) なのである。

このように、現在のウズベキスタンにいるタジク人たちが強いタジク郷土意識をもっている限り、ウズベクにのみ重点をおいた文化政策を進めることは危険である。ウズベク・タジクという二重アイデンティティーをもつ人々が多くいるウズベキスタンでは、単独のナショナル・アイデンティティーを形成することは不可能である。行き過ぎたウズベク化の推進はウズベキスタンの分解につながりかねない。独立して間もない中央アジアの諸国はウズベキスタンを含め、いずれも解体の危険性を含んでいる。しかし、解体は紛争に直結している。中央アジアのユーゴ化はなんとしても避けたいものである。

注

- 1) 江上波夫編『中央アジア』世界各国史16、山川出版社、1987年、674-675頁。
- 2) ヴァンサン・モンテユ、森安達也訳『ソ連がイスラム化する日』中央公論社、1983年、95-98頁。
- 3) 同上、111-112頁。
- 4) Lawrence Krader, *Peoples of Central Asia*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic series, 3rd edition, 1971, p. 38.
- 5) *Ibid.*, p. 39.
- 6) *Ibid.*, p. 38.
- 7) Jiri Becka, "Tajik Literature from the 16th Century to the Present," in Jan

- Rypka (ed.), *History of Iranian Literature*, D. Reidel Publishing Company, 1968, p. 486.
- 8) Edward A. Allworth, *The Modern Uzbek*, Hoover Institution Press, 1990, pp. 224-231.
- 9) Gerhard Simon, translated by Karen Forster and Oswald Forster, *Nationalism and Policy toward the Nationalities in the Soviet Union*, Westview Press, 1991, p. 290.
- 10) С. ШАМУХАМЕДОВА, “Матлаб-ал-Анвар,” *СБОРНИК НАУЧНЫХ ТРУДОВ* № 546, *ВОСТОКОВЕДЕНИЕ*, Ташкент, 1977, p. 160.
- 11) Keith Hitchins, “Modern Tajik Literature,” in Ehasan Yarshater (ed.), *Persian Literature*, The Persian Heritage Foundation, 1988, pp. 455-456.
- 12) *Ibid.*, pp. 457-460.
- 13) *Ibid.*, pp. 463-464.
- 14) *Ibid.*, pp. 464-465.
- 15) Jan Rypka, *op. cit.*, p. 582.
- 16) E. Yarshater (ed.), *op. cit.*, p. 467.
- 17) *Ibid.*, p. 474.
- 18) Abdulaziz Kamilov, “Internal Conflicts in Soviet Central Asia,” in Kumar Rupasinghe, Peter King and Olga Vorkunova, *Ethnicity and Conflict in a Post-Communist World*, The Macmillan Press, 1992, p. 149.
- 19) *Ibid.*, p. 143.
- 20) Seymour Becker, “National Consciousness and the Politics of the Bukhara People’s Conciliar Republic,” in Edward A. Allworth (ed.), *The Nationality Question in Soviet Central Asia*, London, Praeger Publishers, 1973, p. 160.
- 21) Barry M. Rosen, “An Awareness of Traditional Tajik Identity in Central Asia,” in *ibid.*, p. 71.
- 22) АҚБАР ПИРУЗИ, *ТУФОНИ ДИЛ*, Шуъбаи Самаркандии нашариёти адабиёт ва санъати ба номи Гафур Гулом, 1991, p. 28.
- 23) *Ibid.*, p. 28.
- 24) *Ibid.*, p. 29.
- 25) САЛИМ КЕНЧА, *САЙКАЛИ ДИЛ*, Шуъбаи Самаркандии нашариёти

адабиёт ва санъати ба номи Гафур Гулом, 1991, pp. 5-6.

キーワード：ウズベク、タジク、アイデンティティー、ワタン、ネイション

Modern Poets in Samarqand

by Akiro MATSUMOTO

Following the collapse of the U.S.S.R., the newly independent Central Asian countries are facing various problems. One of these problems is harmonizing the various ethnic groups in each of these countries, as there is no single-nation-country in Central Asia. Each of the countries is comprised of more than five large ethnic groups. In fact, the borders of each of these countries were established about sixty years ago during the Stalin regime to benefit the Kremlin. Therefore, the existing borders are not the traditional ones, and this has resulted in many ethnic groups being jammed into a country in an unnatural way. The forced emigration of minorities into Central Asia happened frequently during the Stalin age. Or, an ethnic group was divided into more than three countries to conform to the border-making policy of the Stalinists.

Uzbekistan is one of the most important countries in Central Asia from the viewpoint of its geography, population, natural resources and culture. Yet, it is also a country fabricated under Stalin. In fact, prior to the establishment of "Uzbekistan" this word did not exist historically.

The Uzbeks had no concept of "a land for the Uzbeks" prior to this time. During the age of Jadidism in Central Asia, however, the Turkic people considered the area to be called Turkestan, which means "motherland of the Turkic people." The Turkic people did not consider their motherland to be called Kazakhstan, Kirgistan, Uzbekistan, or Turkmenistan.

Modern Uzbekistan has inherited many of the heritages of the former Soviet Republic of Uzbekistan. This means, therefore, that there are potential elements for ethnic conflicts, as there are numerous ethnic groups living in modern Uzbekistan. Among these ethnic groups, the Uzbeks and the Tajiks are the most important ones. In fact, the Uzbeks and the Tajiks have a common culture, although the modern Uzbek language is Turkic and that of the Tajik Iranian. In addition, the modern Uzbek language is based on the so-called Sart-Uzbek language, which is a mixture of Turkic and Persian. There are, therefore, many bilingualists among the Uzbeks and Tajiks. This is one of the difficulties for the creation of "Uzbekness" in Uzbekistan. Yet, the Tajiks in Uzbekistan have a stronger feeling of attachment to their culture than the Uzbeks because of their identification with historical Iranian cultural traditions.

Samarqand and Bukhara are two centers of the Tajik people and culture, even though they are now in Uzbekistan. Modern Tajik poets of Samarqand, like Akbar Pīrūzī and Salīm Kinja, often praise the two cities in their poems as the birthplace of Tajik culture. Ispitamen, a hero of the resistance against Alexander the Great, is still a national hero of the Tajiks. Medieval Persian poets, like Rūdākī and Firdawsī, are regarded by modern intellectuals in Samarqand as ancestors of modern Tajik literature. This strong attachment to modern intellectuals in Samarqand may eventually lead to a separatist movement of the Samarqand and Bukhara

regions from Uzbekistan. If Uzbekistan's ruling class intensifies its Turk-nationalistic policy, ethnic conflict between the Tajiks and Uzbeks may occur in the future. If a Balkan-type ethnic conflict should occur between the Tajiks and Uzbeks, it will bring about a great confusion and disaster not only in Uzbekistan, but also to the whole Central Asia region, including Afghanistan. In fact, internal conflicts in Tajikistan and Afghanistan are exerting direct as well as indirect influences on Uzbekistan's internal policies. The Tajiks and Uzbeks in Uzbekistan are influenced by the political trends of the Tajiks and Uzbeks in Afghanistan and Uzbekistan. So, modern Uzbekistan is now required to develop a very careful policy in the handling of its ethnic problems.